

インドネシアやフィリピン

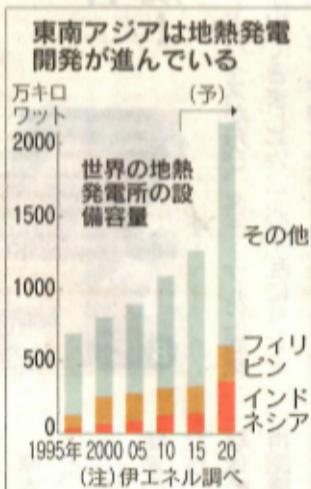
インドネシアやフィリピン各地で地熱発電所の開発が相次ぐ



環太平洋火山帯に位置する東南アジアでも、インドネシアとフィリピンは世界有数の地熱資源を持つ。資源量はインドネシアが2700万キロワット、フィリピンが600万キロワットでそれぞれ世界2位と4位だ。フィリピンは2力発電と異なり、世界的規模の案件も珍しくない火

010年時点では190万台と電力の15%弱を地方へさらに税の軽減や地方政府の開発権益の譲渡を進め、活気付いている。地熱発電は数千億円規模の案件も珍しくない火

火山帯、資源量が2位・4位



地元・欧米勢とタッグ

ラントの地質調査大手G NSサイエンスは今月、比地熱最大手のエネルギー・テペロップメント(E DC)と提携した。イタリア電力大手のエネルギー・スケループはインドネシアにもフィリピンで試掘にはいる。仏GDFスエマージン・パワー(E P I)を今年買収し発電工事を進める。ニュージー

な大手と呼べる企業は少く、アジアは地熱開発の米エマージン・パワー(E P I)を今年買収し発電工事を進める。ニュージー

東京外山尚之

インドネシアやフィリピンなど東南アジアの島国で地熱発電所の開発が加速している。電力不足の解消へ、政府が世界有数の地熱資源の活用を後押ししているからだ。各地の計画には地元企業は成長市場で好位置につけています。

伊藤忠や九電など

スマトラ島北部。うつすためのやぐらだ。掘削装置がうなりをあげ地下と高さ55mを超える巨大なやぐらが目に飛び込んでくる。地中のマグマで温められた熱水を取り出

年11月の稼働へ建設がヤ

世界最大、来年11月稼働

会社などの合併会社だ。山間地を切り開き、重機が走り回る道もゼロから通した。1600人が

足りず、1千キロ近く離れたジャワ島からの出稼ぎも多い。労働力確保や

マ場を迎えた地熱発電所「サルーラ発電所」だ。発電容量33万キロワットは日本最大の八丁原発電所(大分県九重町)の約3倍で世界最大、事業費は

1千億円超を見込む。事業主体のサルーラ・オペレーションズは伊藤忠商事や九州電力、地場石油大手メドコ・エネルギー・インターナショナル子

ドルが多い。「世界で資源ビジネスから発電所建設まで手がけた経験が生きている」と伊藤忠出身の油屋真一最高経営責任者(C EO)は話す。

地熱発電は探査から稼働まで10年がかりの例も多く、見誤れば投資を回

取できない恐れもある。それでも開発が自白押しのは政府の後押しがあるからだ。インドネシア

足元の石油価格こそ低いが、ジョコ大統領は22日「我々は地熱資源を最大限活用していない。インドネシアはエネルギーの主権国家になれる」と述べ地熱発電の推進を掲げる。2025年までに電力の25%を再生可能エネルギーで賄う方針。世界2位の資源を持つ地熱が大半を担い発電量は今後10年で現在の7倍の950万キロワットに増やす計画だ。土地収用手続きも簡素化し開発を支援する。

電子版にアジアの最新情報をまとめた「アジアBiz」コーナーを開設。▶ビジネスリーダー→アジアBiz 英文サイト「Nikkei Asian Review」でもアジアのビジネス情報を発信します。ツイッターも開設しました。